

# 生命にとって塩とは何か

— 生物と塩との関係史 — 11

京都大学名誉教授  
近畿大学農学部教授

高 橋 英 一

## 8 塩と政治経済

### 貨幣の代わりをした塩

塩分（実質はその中のナトリウム）は人間が生きてゆくためになくてはならない成分である。狩猟採集時代の人類は、それを自然の食物の中からとっていた。今でもそれに近い生活をしている少数の種族はいるが、世界のほとんどのところでは無機塩—塩化ナトリウム—が塩分の補給源として用いられている。塩は農耕生活によって人間が定住化し、村落の形成が進むとともに重要な交易物資、商品としての地位を獲得していった。それは堆肥などの有機物を肥料として使っていた農業が、19世紀に入り無機塩を用いるようになって以来、無機化学肥料として急速な成長をとげたのに似ている。

塩はなぜこのような地位を得たのだろうか。塩は人間の住んでいるところでは常に必要とされるものであるが、岩塩であれ、海塩であれ塩の入手できる場所は地理的に局在しているので、人口が増加し広がって行くにつれて、需要地と供給地との距離が離れ、塩が局地的な資源となったことが大きな原因だろう。それは今日、石油が世界中で広くかつ大量に使用されているのに、石油資源は局在しているのに似たような関係であったといえよう。

塩は古くから世界の各地で貨幣の代わりに用いられてきた。13世紀のチベット貨幣は塩であったという記述が、マルコポーロの「東方見聞録」にあるという。わが国も江戸時代には塩は米、綿とともに「三白」と呼ばれ、物価の標準にされていた。

信州の松本藩には「塩手制度」というのがあり、藩は塩一俵の上納に対して粃一俵を支払ったという。さらに街道を通過する塩に対して、「運上塩」

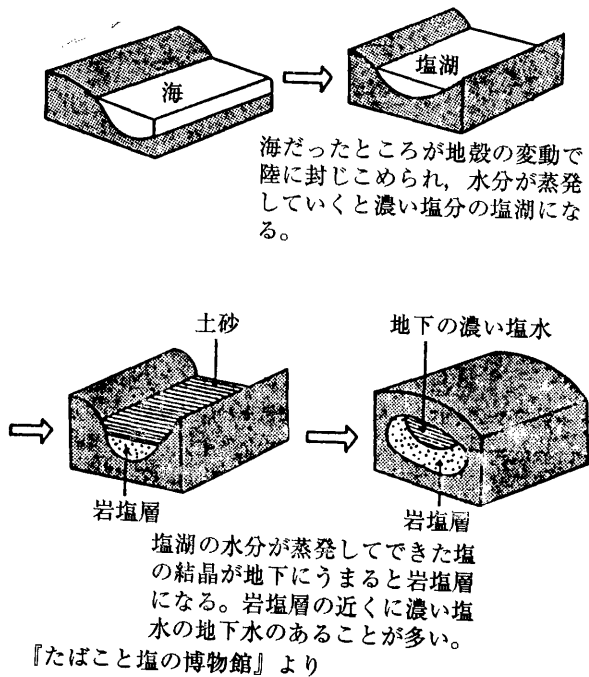
と称して一定の割合で現物を徴収するなど、「御用塩」確保のためにいろいろな制度をつくっていた。このように塩には税がかかるため、人々は塩のきいた魚などを買い、塩分の補給をはかった。塩辛いサケやブリが多く食べられたのは、保存食であることのほかに、このような制度の影響もあったといわれる。また北安曇野の高冷地で米の収穫の少ないところでは、人々は塩などの物資を運ぶ荷役にでて駄賃として塩をもらい、その塩を上納して米を得た。このように塩と米とは互いに交換できる通貨であり、握り飯に塩という生理的嗜好的關係のほかに、密接な経済的關係があったことは興味深い（亀井千歩子著「塩の民族学」東書選書による）。

### 文化の中心地となった塩の産地

塩の給源としては岩塩と海塩がある。わが国には岩塩はないが、ヨーロッパ、アメリカ、アフリカには厚い岩塩層の堆積があり、中には岩塩層をくりぬいて観光資源にしているところもある。ポーランドのカルパチア山中にあるウィリッカという町の「塩の宮殿」や、南米コロンビアのボゴタの近くにある「塩のカテドラル」などは有名である。

岩塩は古い地質時代に陸封された海が、高温乾燥の気候の下で蒸発してできるので（図7参照）、岩塩の出るのは大陸の内部におおむね限られている。オーストリアのザルツブルグ（「塩の町」の意、その中をザルツバッハすなわち「塩の川」が流れている）は2500年も前から塩の交易で栄えた。ザルツブルグ南東のハルシュタットでは岩塩が採掘され、貴重な物資として、当時やはり貴重品であった鉄製の道具や武器などとの交換に利用された。このためハルシュタットは古代ヨーロッパの文化の中心地として一時期栄え、歴史に

図7 岩塩層のできるまで



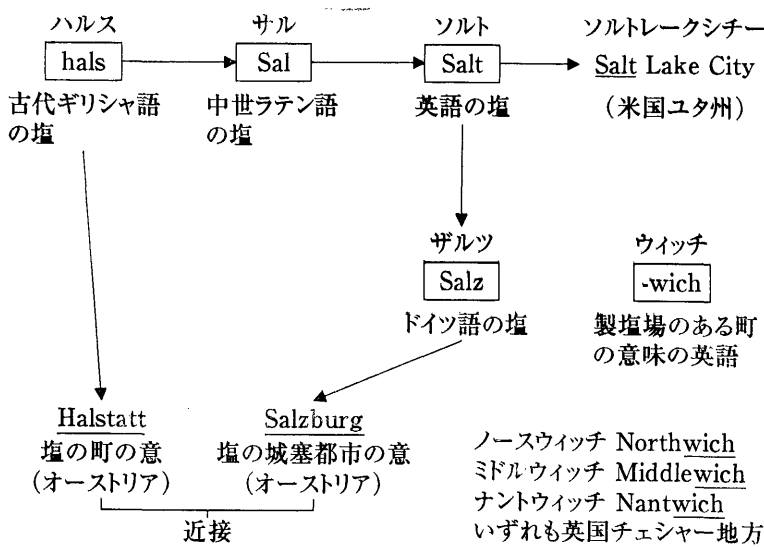
「ハルシュタット文化」の名を残すにいたった。そのほかアルプスのチロル地方、西ドイツのザールやリュネブルグ、フランスのフランシュコンテなど、塩を産するところはいずれも昔の文化の中心地であった。

下って産業革命後の18世紀から19世紀にかけて、イギリスは世界一の塩生産国であったが、その中心地はノースウィッチ、ミドルウィッチ、ナントウィッチなどで、製塩場のある町を表すウィッチという地名がそれを示している(図8参照)。

塩と政治

岩塩鉱床や塩湖をもたないわが国では、海水を濃縮して得られる海塩を利用してきた。その方法は藻塩焼き(6世紀飛鳥時代)から揚げ浜式塩田(8世紀奈良時代)を経て入り浜式塩田(17世紀江戸時代)へと発展していった。わが国は海岸線が長いので、塩田は日本海、太平洋、瀬戸内の沿岸随所にひらかれ、つくられた塩は

図8 塩を意味する語根とそれを冠した外国の地名の例



「塩の道」によって内陸部へ運ばれたが、海から遠く離れた山国ではいろいろ苦勞が多かった。「敵に塩を送る」という故事もそれを物語っている。

山に囲まれた甲斐の国では、海辺の産塩地から領内へ塩を運びこまねばならなかった。ところが武田信玄の勢力を恐れた周辺の北条(相模)や今川(駿河)らは、太平洋岸でつくられる「南塩」が武田領へ送られるのを差し止めてしまった。これに対して、信玄のライバルであったが道義を重んじる武将であった越後の上杉謙信は、自分の領国の塩すなわち日本海産の「北塩」を送ったといわれる。これが「敵に塩を送る」の故事である。

表14 甲斐、信濃の塩に関する地名の一例

甲斐の国 (山梨県)

塩山, 塩原, 塩田, 塩ノ上, 塩沢, 塩ノ前ほか

信濃の国 (長野県)

塩尻, 塩川, 塩田平, 塩野, 塩水, 塩田河原, 塩ノ入り, 塩名田, 塩倉, 塩沼, 塩生, 鹿塩, 海尻, 海ノ口, 小海, 海瀬ほか

海から隔絶された甲斐、信濃の国(今の山梨県と長野県)には不思議に塩に関係した地名が多い(表14参照)。このあたりは5万年前は海であったのが、海底の隆起によって

盆地になったといわれるが、それが地名となって残っているのかと思いたくなる。しかし現在岩塩がでるわけではない。あつたとしても、長年月にわたる豊富な雨に洗い流されてしまったのであろう。

表の地名のうち「塩尻」は、塩の行き止まりの土地を意味する普通名詞が地名として定着したものである。このうち最も有名なのは中仙道の宿場があった現在の塩尻市であるが、信州には塩尻の地名がこのほかに三カ所ある。そのいずれもが南信近くにあり、塩の輸送路が北から入ってこれらの地点を終着地としていたことを示している。

下って江戸時代になると、有名な赤穂浪士の討ち入り事件の背景に、塩をめぐる経済的な争いがあったという説がある。歌舞伎の忠臣蔵で浅野内匠頭を塩治判官という名前にしているのは、その辺の消息を物語っている。播州赤穂の浅野家は塩田事業に力を入れ、すぐれた製塩技術を持ってい

た。赤穂塩は藩の重要な財源であった。一方の吉良家も所領の三河で製塩を行っており、両家は江戸の市場をめぐるライバルの関係にあった。そこへ吉良家からの技術援助の依頼を浅野家がこたわったとか、吉良家が送り込んだ産業スパイを斬ったとか、吉良の塩が江戸市場を独占しようとしたところへ赤穂の塩が割り込んだとか、塩の製造販売をめぐる両家にはさまざまな葛藤があり、その延長上に元禄14年の内匠頭の殿中刃傷事件があったといわれる。

米以上に塩の有難みのなくなってしまった現在では想像もつかないことであるが、太平洋戦争のときには塩は米とともに貴重な配給物質であった。塩は米のようなカロリー源にはならないが、われわれが生きて行くために米とともになくはないものであるため、政治経済上大きな意味をもつことがあるのである。